

## 瀬戸内カヤック横断隊 PART II

TENSION 井上好司

### 横断隊は「海旅人のプロ」養成道場

横断隊は「シーカヤックガイド養成プログラム」・「シーカヤックガイド道場」なのだそう。初代隊長のあの人が言うのだからきっとそうなのだろう。でも僕にはピンと来ない。たぶん僕にとっては違う。あえて言うなら、「海旅人養成道場」。

シーカヤックを漕ぎだしてもう 7 年ほどになるが最近になって僕はシーカヤックで航海すること海旅をすることが好きなんだという事に気付いた。日帰りでツーリングしたり 1 ~ 2 泊のキャンプツーリングは楽しい。波音を聞きながら気の合った仲間と酒を飲みつつ暗闇を感じ月明りを感じる事の大切さを知ることができたのはシーカヤックに出会えたお蔭だ。一週間程度の商業ツアーに参加するのもとても楽しい。でも自然と向き合っているかという、向き合っていない訳ではないけど希薄だ。大事なところをガイドに任せてしまっていて自分で感じ考える機会を失っている。「大事なところ」は言い換えると「最も面白いところ」と言える。

ルートプランニングを自分でしようとするのが当然のことだが自然と正面から向き合うことになる。天候・風向き・潮汐・はるか遠くの低気圧・目に見える地形・目に見えない地形・海底の地形などなど。予想し得るリスクや困難を避けなるべく安全に行けるルートを考える。万一の場合の逃げ場を用意する。アウトドアをするという事はこういう事なんだと思う。

都会の生活はあらゆるリスクや困難を可能な限り取り除いたところでなされている。都会人はリスクや困難が取り除かれたところで生きている。とても素晴らしいことだ。アウトドアをするという事はそのリスクや困難を取り除いていないところに身を置くことに意味があるのではないか？整備された登山道を歩くことや商業ツアーに参加するという事はリスクや困難を可能な限り取り除いたところに身を置いているに過ぎない。リスクや困難を避ける為に感じたり考えたりしなくても安全を保つことができる。「都会感覚のままのアウトドア」。

シーカヤックを真面目にやっている人なら誰もが感じたことがあるだろう。浜から艇を滑らせて海に浮かんだ瞬間、今まで自分の感覚器官に纏っていた物を取り払われて直接感じ始める快感と怖れ。例えば風の向き・強さ・湿り気など都会ではあまり感じていなかったものを感じ始める。纏っていた物を取り払ったおかげで、自然が僕に様々なことを語りかけてくれているようだ。こんな感覚は商業ツアーや整備された登山道を歩いても少しは感じることはできる。でもその濃度はかなり違う。あたかも自然が僕を迎え入れてくれた

かのように思えてくる。

僕が好きだという航海・海旅とは自分の感覚をそういう状態にして海に出る事だ。(これを山でもできるなら山旅でもいいのだが…)自分の感覚で感じ取りその感じ取ったデータを基に考え行動を決定する。言葉にすれば一行にしかならないがこの内容は膨大だ。プロの将棋棋士が百手先を考えながら一手を打つように、剥き出しになった感覚が感じ取るデータ量は膨大でその中から必要なデータを取捨選択してそれを基に考えて決済する。それを瞬時に、長くてもせいぜい5秒くらいで。

海旅はそんなことを繰り返しつつ行われていく。僕にとってそのトレーニング場になっているのが「横断隊」だという事に気付いた。という事は横断隊は練習の場であって本番ではない。瀬戸内をグレンデに7日間行われるトレーニング。瀬戸内を道場として行われる修行。本番は山用語では「本チャン」。横断隊が本チャンでないならどこかで本チャンをしなければならない。本チャンをすることのないトレーニングなんて意味ないじゃん。

という事で今年のGWに初めてソロ遠征をやった。大阪から瀬戸内に入るのにはどうルートをとればいいのかから考え始めた。結局和歌山の加太から出艇、友ヶ島経由で淡路島に渡り南岸を西進して紀伊水道を鳴門に渡る。さすがに鳴門海峡に突っ込むのは嫌なので小鳴門海峡を抜けて瀬戸内に入った。これは今後も続けるつもりだ。もちろん海域を替えて。

だから横断隊は「海旅人養成道場」でもあるのだと僕は思っている。ガイドになるつもりのない人も参加していいのです。

今年3度目の横断隊で初めてリーダーを務めた。横断隊のリーダーはナビゲーション訓練とリーダー修行だと先程(第1編)書いたが、ナビゲーション訓練はリーダーでなくても本人次第である程度はできる。1回目・2回目の時にリーダーについて行きながら僕自身ナビゲーションの練習はやっていた。でもリーダー修行はある程度想像はしていたけどメンバーとして漕ぐ場合やソロで漕ぐ場合とパーティーで漕ぐのとはかなり違う。究極のガイド修行たるゆえんはリーダー修行の行き着く先なのかもしれない。

初代隊長： ハハハハハ・・・そうなんだよ、シーカヤックアカデミーだからして、商業ツアーガイドを育てるとというのが始まりだった。もちろん、ガイド志望じゃなくても参加できる・・・とはいえ、商業ツアーガイドは、プロである。プロフェッショナルというのは、本職でもあるけど、専門家や専門的な人まで意味しているから、シーカヤックのプロ養成なんだな。

井上 好司：僕はシーカヤックの専門家になるの？

うーん、

海旅人になる、でいいじゃん。

初代隊長： だんだん、専門的になってんじゃない！

井上 好司： へー、  
そーなん？  
山屋にこの世界の魅力を伝えようと、いろいろ考えているけど。

初代隊長： 「シーカヤック教書」118 ページ、カヤック隊の行動というところを読んで下  
だされ・・・(\*1)

井上 好司： 誰かに貸して返ってこない。

初代隊長： 売っている

井上 好司： 既に二冊買った。  
もう買わん。

初代隊長： あげようか？

井上 好司： ありがとうございます。  
お気遣いなく。  
またお話し聞かせて下さい。

初代隊長： ソロ以外でのシーカヤックの海旅は、チームワークの世界に変化する・・・

井上 好司： チームワークの世界にはとても興味が向く。  
新しい世界への展開とでも言っているような。

3 代目現隊長： プロであろうがアマチュアであろうが海旅人になった後のビジョンをいかに  
見ることができるか、実践することができるか、それが横断隊の意義。  
海から無償で得たものをいかに世の中に還元できるかでしょうね。

井上 好司： とりあえず僕の周りの山屋に伝えたくて…  
ところがなかなか伝わらないジレンマがあるのです。もっと深めないと…

3 代目現隊長： 山を目指す人はいわゆるサミット、オンリーワンを目指す自己完結思考。

対して海は陸を目指す、いわゆる人の生活や文化が根づく場所。世俗と無縁では漕ぐことが難しいのも瀬戸内の海の特徴。海は人と人を繋げ国と国も繋げる。そうビジョンが広がるのも海旅でしょうか。

どちらも自然であることには変わらないのですから伝わる人には伝わるのでしょうかね。井上さんの文章から気づかされることも多いです。

井上 好司：海と山では目指す場所に違いがあるということに初めて気付きました。

考えたことがなかった。

ありがとうございます。

初代隊長：海旅人のプロ・・・ということになるの。旅は「賜ぶ」であるからして。

3代目現隊長：なるほどー。海旅人のプロ、、、そうですね！

井上 好司：海旅人のプロは海旅人の専門家、ですね。

隊士 H：とても面白かったです。ほんとは海に対してプロもアマもなく、その人の言っていることが本物かにせものか、深いか浅いか、面白いかおもしろいか、が肝心なんだと思います。プロが、とかいうとえてして資格などの話に繋がり、中身そのものは形骸化してその分野だけの内輪ノリになりがち。そういうのもまた必要な事だけど、井上さんみたいな立場の人ももっと増えればいいですね。プロと言っても、テクニク的にはああ確かにこの人プロだなあと感心するけど、見識とか感性とかが浅いなあ、なんか貧しいなあ、って人もいっぱいいますから。逆にプロじゃない人がそこらへんを凌駕してしまうと思います。そういう意味でもこのレポート面白いですよ。

初代隊長：シーカヤッキングは海旅と翻訳する。英語でシーカヤッキングというのは、他に言葉がないからである。シーカヤックで旅をするという行為に適切な翻訳が海旅なのである。だからして、シーカヤッカーは、海旅人と翻訳する・・・シーカヤックガイドは、海旅人のプロだわな・・・

井上好司：うーん、

初代隊長がプロという言葉を使うとどうも僕はよくわからなくなる。

3代目やHさんのプロであろうがアマであろうが関係ないと言った後のコメントは実にすっきり僕の胸に収まるのに。

シーカヤックのプロであるガイドの中にもテクニクは確かにプロでも感

性・見識の浅い人もいる。つまり良質の海旅人ではない人もいる、ってことでしょう。

「海旅人のプロ」ではなくて「海旅人」でいいように思う。  
初代隊長とは見てるものが違うんだろうな。そんな気がする。

隊士 H： 修験道でいう先達とか、武芸などでいう師範とかの感じが、プロってことなんじゃないですかね。自分の領域を超えて他者に伝えたり、教えたり、表現したりして影響力を持つ人。で、アマは妙好人みたいな存在。旅することそのものの中身はプロもアマも変わらんけど役割が違うというか。

井上好司： 「プロと言っても、テクニク的にはああ確かにこの人プロだなあと感心するけど、見識とか感性とかが浅いなあ、なんか貧しいなあ、って人もいっぱいいますから」

このことは山屋の世界にピッタリ当てはまりますね。体力・技量を磨いてより高みを目指す。高い所に達した者ほど評価される。個々人もそういう意味での高みを目指すことに面白みを覚える。でも山に入って何も感じていない。感じていないから当然何も考えていない。

いい例が、南アルプスが大好きという人にリニアをどう思うかと質問しても何も答えが返ってこない。大好きだと言ってる赤石岳のどてっ腹にトンネル掘るんだよと言ってもピンとこない。たぶんそれで南アルプスの自然のサイクルがどう変化することになるかイメージできないんだろうな。これがまさしく「都会感覚のままのアウトドア」。どう変化するかはわからなくても、「それは拙いことになる」というくらいは感じて欲しいと思うのです。

#### \*1 「シーカヤック教書」 P118 カヤック隊の行動

(前略)

カヤック隊は、それぞれがシーカヤックの船長でもあり、船長の集まりです。初心者であっても漕ぎ手はそのシーカヤックの船長でもあるわけです。そのシーカヤックに責任を持つのが船長であり、初めてシーカヤックに乗った場合でも、そのシーカヤックの動きは船長によって決まります。カヤック隊というのは船団や艦隊なのです。船団の一翼を担う船の船長だという自覚が、最初から求められます。初めてシーカヤックを漕ぐ人であっても、その事実に変わりはありません。

(後略)